

若き人人へ

長谷川寛治

体育関係の集りだけではないが、俗に〇〇時間と称するものがあつて、定刻に集らない事が当然の様な事となつてゐる。柏崎体育団は卒先この弊風を打破するためこゝに「スポーツマン・タイム」を提倡する。願わくば体育人各位の賛同と、心からなる協力を望むものである。

1スポーツマン・タイムは定められた時間（案内にある時間）の五分前に会場に到着することである。

2スポーツマン・タイムは定時に予定行事が予定の通り開始出来るようになることである。

3スポーツマン・タイムは其の集会中適当の時間に、次の会合もスポーツマン・タイムにより集まる事を確認する申合せをなすものである。

4スポーツマン・タイムを度々無視する如き人物はスポーツマンとして其の名に値しない者とみなすことを含みとするものである。

ボーッツの秋、虫の鳴き声を聞きながら思索に耽ける秋の夜長、昼はボーッツを楽しみ、夜は静かに読書ができる。このシーズンに、若学生諸君と、ともにボーッツについて考えてみよう。
夏休み中に、ボーッツの選手として各種競技大会に活躍した人もあるだろう。家族連れで海に泳ぎ、友達と一緒に登山した人もあることだろう。若き日の思い出の一つである秋の体育大会も間近に迫っていることと思う。それらの何れをとつてみても、ボーッツといえばボーッツといえる。ボーッツの定義は人々によって異なるが、大別して次の二つに分けられると思う。スポーツは勝敗は第二として、レクリエーション的なものであるとの考え方がある一つ。
厚生運動即ちレクリエーションは単なる享楽や、時問つぶしと違い、それは身心を常に清新に保ち、生活や仕事に歡喜を見出させる源泉となり、衛生的に健康であり、心理的には快適であり、道徳的に健全なもの

であることは、今までしたことのないことがある。もう一つは、スポーツは争いであるから、そこに勝敗がつきものであるとの考え方である。つまり鍛錬的な意味をもつものである。若い人々には勝敗を争うことなどということには、興味が少ないことだろうと思うから、ここではスポーツを次のように定義しては如何であつてか。

スポーツは獣類の争いとは違つて、人間の争いであり、文化人の争いであると考え、「スポーツ」とはルール（規則）に従い、エチケット（礼儀・習慣）を守り、勝利と「うつの目的」（理想）に對して、現在の自己の全能力——技術、精神力・体力、即ち *Skill-Spirit-*Stamina** を發揮して、ベストを出すことである。」

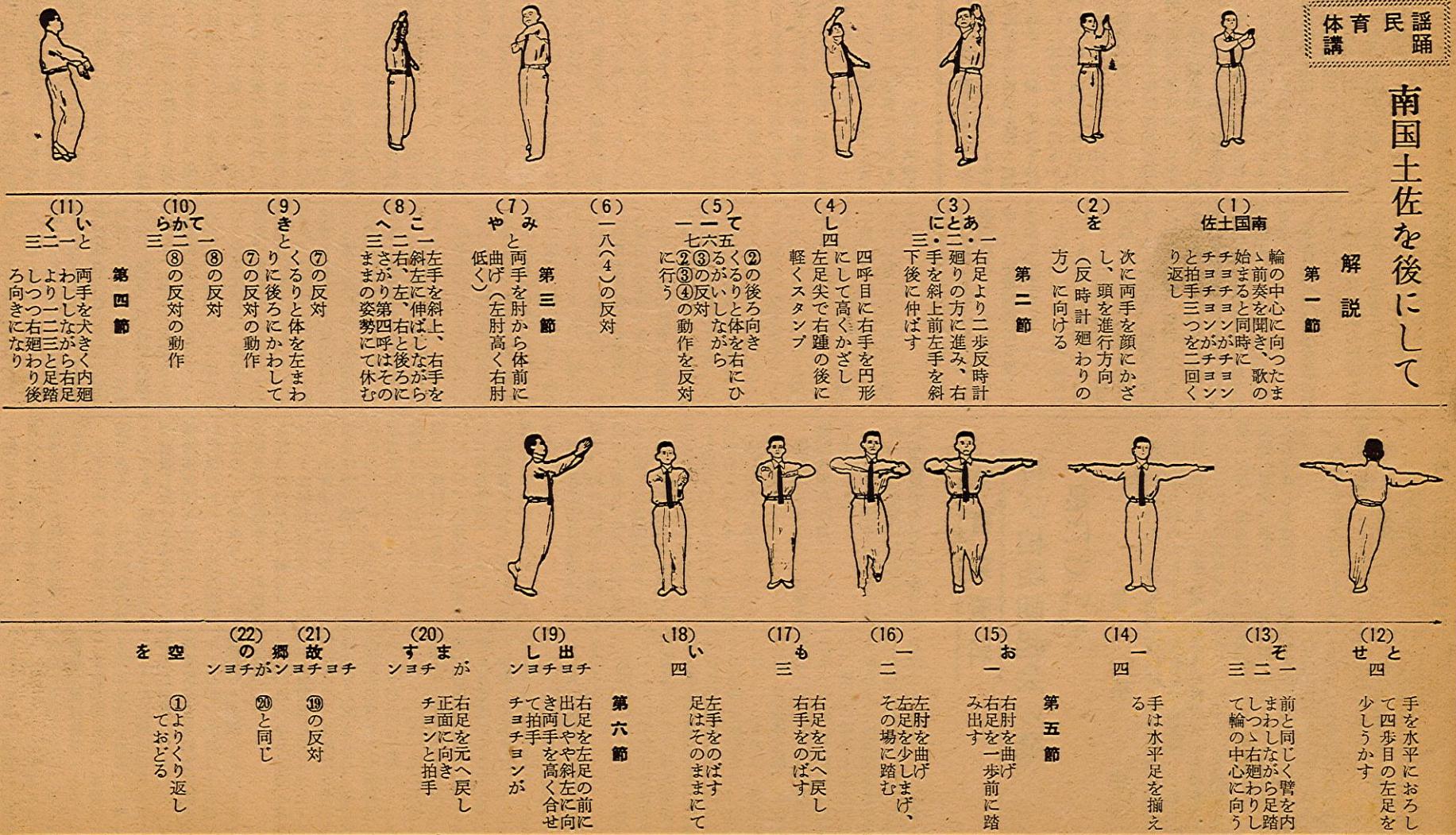
ルールに従わなければ勝則があるが、エチケットを守らなくとも、別に罰則はない。エチケットの根本主旨は、争うからには自分分ベスト・コンディショニングをおきたい、と同時に相手の人格を尊重して、相手に



○全日本学生庭球連盟顧
門

謠 踊 民 育

解
說



道徳教育は必要である

刈羽教職員諸兄に捧ぐ

この一文、謹んで 柏崎 のに。

校訓に曰く

「時間を使りましょう」

「集合解散はきまりよく」

× × ×

「五百米走るる極めてや

やこしい競技が始まる。要

するに年齢別と性別で二十

才台の男子何名、女子何名

四十才の男子何名、女子何

名と言つた調子で編成され

た十名が一人五十米づつ走

る継走である。「走者順は

五十五、バラ、と集まる。

しかもとに角式終了までに

間に合つた者の数の少なさ

よ。全員で何名いるのかは

知らないが恐らく半数には

足りない数と見た。しかも

バスを借り切つて団体でか

けつけたグループもあつた

老齢者、次いで又若い男

子、そして女子又は老齢者

は老齢者、次いで又若い男

子、そして女子又は老齢者

ピンチには眼をつぶれ

田村二二八日記

六年半の在任中、この年程忘れ難い多彩な想出に満された年はない。即ち川上校長、栗林教頭を送り、小師校長、大谷教頭を迎え首脳陣が一新し、北陸一を誇る体育館が完成した。そしてその間に於ける校務の処理推進に払われた心身両面に亘る配意は筆舌に尽し難い深刻さがあつた。その虚をつかれ、野球が郡市予選に敗れ、上越大会に出場不能と言う創立以来の汚点を残してしまった（排球は予選を経ずして推薦出場したが二回戦で敗れている。これも予選があつたら危うかった。）そして七月末、この野球部主将沢久夫君が選ばれて訪独健民少年の一員として羽田を発つ。更に八月、第二回県中学校陸上競技大会が佐渡郡真野競技場に開催されるに当り、選手を折から伝中の柏崎・小木航路を使用せず、直江津経由で輸送した事が問題となつて連日新聞紙上を賑わし、各方面から御見舞状をいたぐ始末だった。そしてこの秋例の相模湖の遊覧船転覆事件が起り、定員確保と安全旅行の問題が喧伝されたのだから皮肉である。

活用すべく着々と練習を重ねたのである。投手黒崎、通称「クロ」は勿論その姓黒崎に由来するものであるが、名は体を表すとか、真黒に日焼した四角い顔に眼光鋭く、胸厚く肩もり上り足腰太く（八百競走の選手として県大会に活躍）全く偉風堂々たるマウンド姿であった。秀才の誉れ高かつたが全く寡黙で時折ニヤリと見せる微笑は千金の価があつた。その球筋は多少スピードに難点はあつたが重

いカーブとシューートと多彩を極めたものであった。而してこの大投手黒崎がいよいよ明けてシーズンに突入して見ると思わぬ欠陥を持つてゐる事が判明したのである。それは投手としては致命的とも言うべき神経過敏である「打たれまい」、「インハイが強そうだ」直球はあるない」等々の自意識過剰が、コントロールを乱すのである。この事は多彩の球を持ち練習時には正確の制球力を自負しているのであるだけに悲劇的である。第一球が的をはずれる。

。カーブもシートも直
もいよいよ鋭くなるのだ
、どうにも手のつけられ
荒れ方である。六月五日
一ズン初めの小手調べに
田中（現四中）と練習試
をしたが四回投げ打者一
人に対し四球五、三振二
打二、自責点一の成績。
れも高中の第一球から向
て来る積極戦法に助けら
ての成績で併殺一に助け
れながら残塁六が示す危
に終に五回マウンドを
腕塩浦に譲る有様。そし
て六月九日に開催された市
中学大会の一回戦対三中
に倒れたが、四番小林の
て降板（この試合塩浦好
して五対二で勝つ）そして
絶対の一戦対、西中通戦
は塩浦が先発完投するの
ある。この一戦私の見た
多の中学生のゲームの中
も五指に入る熱戦であり
西中通中が名実共に郡部
強剛として地位を確立す
記念すべき一戦でもあつ
が故にやゝ詳述しよう。
先攻の一中は一番新潟
三塁を強襲して生きるや
うちに二盗、二番千原は粘
て十二球目を左前に打つ
無死一、三塁、黒崎は捕

◎ 銀鮫俱樂部 ◎

(昭和六年) 六年半の在任中、この年程忘れ難い多彩な想出に満された年はない。
即ち川上校長、栗林教頭を送り、小師校長、大谷教頭を迎え首脳陣が一新し、北陸一を誇る体育馆が完成了。そしてその間に於ける校務の処理推進に払われた心身両面に亘る配意は筆舌に尽し難い深刻さがあった。その虚をつかれ、野球が郡市予選に敗れ、上越大会に出場不能と言う創立以来の汚点を残してしまった(排球は予選を経ずして推薦出場したが二回戦で敗れている。これも予選があつたら危うかった)。そして七月末、この野球部主将新沢久夫君が選ばれて訪独健民少年の一員として羽田を発つた。更に八月、第二回県中学校陸上競技大会が佐渡郡真野競技場に開催されるに当り、選手を折から宣伝中の柏崎・小木航路を使はず、直江津経由で輸送した事が問題となつて連日新聞紙上を賑わし、各方面から御見舞状をいただく始末だった。そしてこの秋例の相模湖の遊覧船転覆事件が起り、定員確保と安全旅行の問題が宣云されたのだ

習を重
黒崎、その姓
であるか、眞
顔に眼
り上り
の選手
）全く
ド姿で
高かつ
ニヤリ
の価が
多少ス
たが重
さん（一
・一月十
に「手本
う記事
の筆者注
る銀鮫と
んですか
出でてゐる
本位（日、
課長な
ムバー
係ない
。一寸
ばげられ
うです。
高田にあ
こいつた
よした関
チヤン
名が出来
も持つ
僕等の
会合を
五通り
て退け

いカーブとシューートと多彩な投球を極めたものであった。而してこの大投手黒崎がいよいよ明けてシーズンに突入して見ると思わぬ陥れを持った事が判明したのである。それは投手として致命的とも言うべき神経過敏である。「打たれまい」「インハイが強そうだ」「直球はあぶない」等々の自意識過剰が、コントロールを乱すのである。この事は多彩の球を持ち練習時には正確の制球力を自負している彼であるだけに悲劇的である。第一球が的をはずれる。書類はあぶない。左安九三

内面に対する自己に於ける努力もせず、何處にの教育が出来るのだ。己の月給の為に児童の教育を日稼ぎせしめる邪道教育の革新こそ僕等の務だ。」まあ此んな具務だ。」最も建設を早める破壊から満更出放題とも思ません。やがて口を体現する決心で最も建設を早める破壊その意義ある様に、建設邁進する破壊こそ僕等現状です。」（原文）

良
まゝ)
この一文は「僕等のダ
ループ」というシリーズ
ものの第十四として出
た。なうのうだいだい
ものである。銀鮫俱樂部
は小学校教員の体育研究
団体で、昭和五年設立
され昭和十七年まで続
るものである。高橋勉(現
三宮柿崎小学校長) 笹
芳三(現市教委指導主事
浅倉義一(現木下荒浜
学校長) 笈輪忠尚(現
通中学校長) 月橋套(現
衛生体育課長) 其の他
干が発起人で、其の声
高田第三十連隊に短期
役兵として服務中にあ
つたものである。其の後
西中通中が名実共に郡市
に絶対の一戦對、西中通戰
一日は塩浦が先発完投する
に試すも五指に入る熱戦であ
る。この一戦私を見たるや
多の中学生のゲームの中
一二回も五指に入る熱戦であ
る。この一戦私を見たるや
向記念すべき一戦でもあつ
て十二球目を左前に打つ
に倒れたが、四番小林の
中

一回の定期研究会があり、実技の研修、相互の研究が主であったが、スポーツ大会にもよく出場した。就中バスケット・ボーラーは一番よく柏崎、刈羽では強い方であつた。教員野球大会でも各チームの主軸になつて活躍した大部分はいすれもクラブ員であつた。クラブ内の研究がいすれは、外部へ向つて発表の形をとるわけであるが、その第一回発表会は昭和十一年四月柏崎小学校に於て「体育の本義と目標の体育(俱楽部目的観)の為に」という橋の研究発表を中心として行つて行つて。第二回は同年六月枇杷島小学校に於て高橋勉(現三宮高)の研究発表を中心として行つて。第三回は昭和十一年二月、再び柏崎小学校に於て「冬期体操の問題二・三」と題して行つて。高橋の発表が中心でなくとも部内だけの研究会はよくやつておられたが、对外発表会は十一月六日(第四回)十月(第五回)十二年二月(第六回)十二年三月(第七回)と実際に勇敢に次々と行つて。今その文献を見ると、所謂体育方面だけではなく、佐藤四郎の「

平足の観察調査（昭和十一年）笛川芳三の本校高学年児童に於ける睡眠時間及家庭勤労時間と身体発育との相関々係」（昭和十五年）などもあり、昭和十二年度刈羽郡（当時柏崎市は町であり刈羽郡内に包含）小学校児童身体検査統計はクラブ員全員でやり、その所見に海岸型、山地型、平場型と分析して一応の結論を出している。

尚比角小学校に於て講習会を行おうとして、当時の県体育主事の卑劣なる妨害に会い中止の己むなきに至った事もある。

又こゝにあげないが数々の研究発表は、当時二十才台の者のやつた研究としては、内容的に未熟な点のあるのは否めないとしても、今そのまゝ発表しても決して恥しいものではない。いずれからの圧力でもなく、推奨でもなく、まして依頼でもなく、本当の自由の意志に基づく、己むに己まれぬ心から出した研究団体であったのである。

この様な研究団体は果して今どの位あるであろうか。こと学校体育に関する限り、小体連・中体連、高体連の「くつわ」にガツチリしばられた感じが強く、自由にして熱烈な体育研究団体に乏しいと見るはヒガ目である。

また一中は一点先行してある。然しその裏西吉元井(保)四球、片山安打で無死一、三塁、一(征)は左中間を破つて、三番外山の二で追加点なし、そしてそのまま逆転してしまつた最終回一中の攻撃は満四球、失策等で二死満塁に迫つたが、三番外山の二で追加点なし、そしてそのまま逆転してしまつた新沢である。期待の新沢は堀の第一球を見事に快打して一塁へ、それを沸かせるものがあつたが、しかも小、中、高体連の行事計画は多少の差はあるが、日本体協的役割(つまり資格団体)の臭が強く、大会行事のみ多く見えて、眞の研究に対するベースは余りにも少ないと見るは筆者の「ヒガミ」であろうか。そう思うからでもあるまいが、中学校体育のスポーツ偏重狂熱的態度に対する研究意慾、実践態度に多く見えて、眞の機能も果たさず、しかもその構成因子がこれに反ばかりする力も示さなかつたら、日本の中学校体育は堕落するのでなかろうか。